

# 令和6年度第1回八戸市美術館運営協議会

## 会 議 録

日 時： 令和6年4月17日（水）15：00～17：20

場 所： 八戸市美術館 スタジオ

## 会 議 録

日 時： 令和6年4月17日（水）15：00～17：20

場 所： 八戸市美術館 スタジオ

出席者： 別紙のとおり

発言内容：

○事務局： 本日はお忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございます。  
定刻になりましたので、只今から、第1回八戸市美術館運営協議会を開会いたします。会議に先立ちまして、市長から挨拶を申し上げます。  
本日は熊谷市長が公務のため、観光文化スポーツ部長の工藤より、ご挨拶申し上げます。

○部長： それでは、一言ご挨拶を申し上げます。本日、お集りの皆様には、大変お忙しい中、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。また、委員就任をお願い申し上げましたところ、ご御快諾を賜り、厚くお礼申し上げます。さて、八戸市美術館は「出会いと学びのアートファーム」をコンセプトに、令和3年11月3日のリニューアルオープン以来、それぞれ趣向を凝らした展覧会やプロジェクトなど、積極的に新しい取り組みを実施して参りました。また、市民の皆様はもとより、学校・関係団体などと共に創りあげる取り組みや、貸館としても多くの皆様に利活用いただくなど、当初の目的である、身近にアートに触れる機会や、アートを通じた出会いと学びの場を提供するという、まちや暮らしをより豊かなものとする美術館としての役割を果たすよう努めてまいりました。委員の皆様には、これまでも運営計画に基づき事業の進捗を注視していただいておりますが、今年度は、各事業の評価方法などについてご意見をいただきながら、具体的な成果と課題を検証するとともに、次期中期運営計画の策定に向けて、検討を進めてまいりたいと考えております。

どうか皆様におかれましては、本協議会の趣旨をご理解いただき、忌憚のないご意見とご助言を賜りますようお願いいたします。結びに、皆様からの日頃のご支援とご協力に感謝を申し上げ、私からの挨拶といたします。

○事務局： 続きまして、八戸市美術館運営協議会規則第3条の規定により、会長及び副会長を選出いたします。会長、副会長選出までは、八戸市美術館運営協議会規則第4条の規定により、市長代理で工藤部長が議長を務めさせていただきます。

それでは、工藤部長、議長席へ移動をお願いいたします。

○部長： それでは、会長、副会長を決定するまでの間、議長を務めさせていただきます。規則では、「会長及び副会長は委員の中から互選によって定める」とありますが、どなたかご意見はございませんでしょうか。

◆委員： これまで同様、会長には東京藝術大学学長でいらっしゃる日比野委員、副会長には地元八戸工業大学学長でいらっしゃる坂本委員をお願いしてはいかがでしょうか。

- ◆委員： 異議なし
- 部長： はい。只今、会長に日比野委員、副会長に坂本委員を推薦いただきましたが、異議なしの声もございましたが皆さんいかがでしょうか。
- 委員一同： 異議なし（拍手）
- 部長： 全員の拍手がございましたので異議なしと認めます。それでは会長は日比野委員、副会長は坂本委員に決定いたします。ここからは会長に会議の進行をお願いすることとし、私の役目はここまでとさせていただきます。
- 事務局： それでは、日比野会長、坂本副会長は、どうぞ会長席、副会長席へご移動をお願いします。只今、選出されました日比野会長、坂本副会長より、一言ご挨拶をお願いいたします。
- ◆会長： 只今ご承認いただきました、会長を務めさせていただきます日比野と申します。よろしくをお願いいたします。この美術館ができて3年目になりますが、準備委員会（新美術館運営検討委員会）の時から声をかけていただいて、どんな美術館にしていこうかというところから関わらせていただいております。この会議には大学の先生、美術館の方、地域の方など、地元の活動や地域らしさをしっかりと発信していこうという方々が参加しており、八戸市美術館の運営について意見交換することは、私もそうですけれども、それぞれの美術館や大学、地域が抱える課題や、それに対する取り組みなど、意見を言いながらも学びあえる会議だと感じております。先ほど時間が少なかったのですが、「エンジョイ！アートファーム!!」、「展示室の冒険」、大澤学芸員が担当された地元の方のアーカイブ的な展示（コレクションラボ 007 大久保景造と八戸文化）など、それぞれの空間に合わせた、とても素敵な展覧会に仕上がっているなと思えました。また、青森県内にこれだけ様々な文化施設や美術館があり連携していることは、全国的にも大変特色ある取組だと思っております。八戸市美術館について、全国的なものとか、教育機関とか大学とか、地域活性化とか、様々な視点でご意見をいただきながら進めていければと思っておりますのでよろしくお願いいたします。
- ◆副会長 副会長を仰せつかりました坂本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。八戸市美術館が開館してから3年目になりますが、様々なご意見や評価がなされております。この美術館を立ち上げるに当たって掲げたビジョンやコンセプトを市民の皆様に浸透させるといったことを通じて、愛される美術館を目指して、皆さんとともに活動を推進していければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。
- 事務局： ありがとうございます。続きまして、会議に入ります前に、新年度、事務局の異動があった職員を紹介します。観光文化スポーツ部長の工藤でございます。続いて観光文化スポーツ部次長兼観光課長の下村でございます。本日司会を務めさせていただきます田中でございます。どうぞよろしくお願いいたします。
- 事務局： 次に、本日の会議の出席者のご紹介でございますが、恐れ入りますが、紹介はお手元にお配りしている出席者名簿及び席図をもってかえさせていただきます。ま

た、本会議は、八戸市美術館運営協議会規則第4条第2項により、委員の過半数が出席しているため、成立していることを報告します。なお、会議の公開・非公開についてですが、八戸市附属機関の設置及び運営に関する要綱の第5条第2項におきまして、「個人のプライバシー又は政策形成過程における情報等に係る審議内容で、公開することにより当該附属機関の適正な議事運営に著しい支障が生ずるおそれがある場合を除き、会議を公開すること」とされております。このため、本日は報道関係者による傍聴・取材を受け付けております。また、会議後に作成した議事録は、発言者名を伏せてホームページ等で公開させていただきますので、よろしくお願ひします。それでは、ここからの議事進行は、日比野会長にお願いいたします。

◆会長

それでは、次第に従いまして進めさせていただきます。

はじめに、報告案件の1、「令和5年度事業の実施状況について」、事務局から説明をお願いします。

報告 令和5年度事業の実施状況について

○事務局： 事務局から令和5年度事業の実施状況につきましてご説明いたします。資料1-1をご覧ください。本日はスライドで写真を中心にご説明いたします。入館者数は、令和5年度は10万9,277人で、開館からの入館者数は25万3,589名でございます。次に展覧会の開催状況ですが、「美しいHUG!」という現代アートの展覧会がございました。青木野枝さん、井川丹さん、川俣正さん、きむらとしろうじんさん、黒川岳さん、タノタイガさんというアーティストに参加いただいて開催したものです。次の写真は青木さんのジャイアントルームをいっぱいに使った展示で、青木さんが制作している様子を見ることができる貴重な機会でした。次に川俣さんの《Nest in 八戸》という作品で、美術館の外壁に取り付けた作品で話題になりました。こちらの写真は手話付きのガイドツアーで、アクセシビリティ向上ということでこういったガイドツアーも取り入れています。こちらは「仲條正義名作展」を開催したものです。続きまして「ロートレックとベル・エポックの巴里」で、関連企画としてジャイアントルームで「アートミュージアム晩餐会」を開催しました。普段のジャイアントルームとは様子が違うのがお分かりになるかと思います。プロジェクションで宮殿のように仕上げ、お客様には食事の後、ダンスをご覧いただき、とても満足していただきました。また、こちらは八戸クリニック街かどミュージアムの「木版画でみるジャポニズム」のほか、展覧会に先行して公会堂でミュージカルを開催するなど共創企画もございました。さらに、八戸工業大学感性デザイン学部の学生が中心街の各所にポスター展示したほか、商業デザインに関連した講座や映画上映会、青森銀行の展示スペースで展示を行いました。こちらは関連企画のギャラリートourで手話通訳付きのガイドツアーです。次に貸館ですが、「藤井フミヤ展」で、デザイナーのおおうちおさむさんが会場構成して、1万2,681名の来場者がありました。こちらはコレクションラボ「奏でる工芸」の様子で、工芸作品をイメージした音楽を創作するワークショッ

プを開催し、その映像をブラックキューブで参加者に見ていただきました。次にコレクションラボ「美の殿堂 鈴木コレクション」です。八戸の実業家の鈴木継男さんと妻のあじやさんから寄贈いただいたコレクションの一部をお見せするという、八戸市民が待ち望んだ展覧会でたくさんの方にお越しいただきました。次にほろ酔い鑑賞「ほろハチ」という、当美術館ならではのイベントだと思いますが、ワインを召し上がって鑑賞していただきました。次に、今開催中のコレクションラボ「大久保景造と八戸文化」で、八戸の文化を語るときには、この方なしでは語れないといった方ですが、学芸員が色んな方にエピソードを聞いてまとめあげて展示しています。次に、プロジェクトの実施状況についてですが、アートファーマープロジェクトの「建築ガイドツアー」です。こちらの高校生ガイドは、初めて美術館に訪れたときに、たまたま建築ガイドツアーを見て、楽しそうに活動している姿に興味を持って、自分も新たな繋がりを生む場をつくっていきたいと思うようになり活動するようになったそうで、今も継続して参加していただいています。

次にアートファーマープロジェクトのきむらとしろうじんじんさん「野点プロジェクト」の様子です。昨年度は野点だけではなくて、妄想屋台ということもやりました。私も、妄想を屋台にするとはどういうものなのか、最後にどんな形になるのか、とても不思議だったのですが、参加者が妄想を発表して話し合うプレゼン大会などを行い、こういうことをしたら楽しいんじゃないか、それを実現させるためにはどんなことが必要かを話し合いながら準備をして、当日こういった形で参加者それぞれが妄想を実現させました。

次はアートファーマープロジェクトの「タノミマス」です。そして作品《タノミマス》の準備や運営を行いました。これは共創企画の「あそらぼ」で、木のからくり作家の高橋みのるさんはじめ、3人が企画して美術館と一緒に開催したものです。こちらは「アートファーマーミーティング」ですが、伊藤委員も来ていただいて、それぞれの活動を発表しながら、最後にお茶会をしたという場面です。次は学校連携プロジェクトですが、先生方に集まっていたいて会議をしたりですとか、アーティストの方に学校に行っていたいて、一緒にワークショップをしたりだとか、社会科見学の受け入れとか、小中学生の鑑賞会とか、新聞部の活動など活発に行われました。これは八戸学院大学、八戸工業大学、八戸工業高等専門学校との三校連携の創作体験ワークショップで、「認知症世界の歩き方」ということで、認知症の方が生きている世界を旅してみようというワークショップになっています。八戸学院大学短期大学部の介護の先生がやってくれました。こちらは段ボール工作でオリジナルの人形とブロックを作りました。こちらは「ブリリアント・ミネラル」で、左に写っているのは高専の校長先生ですが、校長先生自ら子どもたちと触れ合ってワークショップを行っていました。こちらは学生と社会人のアートの学び実践講座で、今日いらっしやっている堤委員が考えてくださり、「国の紹介と地球環境を守る取り組みについて」ですとか、「伝統文化とア

ートの和菓子をつくろう」ですとか、「地域と世界をつなぐサステナブルな未来へ」というハイブリッドセミナーなど、国際色豊かにかつ学生も参加するような内容でした。こちらはアクセシビリティ向上ということで無料託児ルームの設置、こちらは「ベビーファーストデー」ということで昨年度から始めた事業になり、たくさんの方に喜んでいただきました。

こちらは武蔵野美術大学の学生による「プチプチランド」で、夏休み期間のプロジェクトとして開催しました。準備の段階から中学生の皆さんにお手伝いいただきました。こちらは帆風美術館とのコラボ企画「新春屏風展」ですが、こちらも多くの方に来ていただきました。こちらは東光会さんで、月に1回程度、こういった絵画教室をやっていただいております。こちらは、ジャイアントルームの新しい使い方ということで、andropの内澤さんのライブで、大宮エリーさんのライブペインティングが行われ、定員いっぱいの200名位にお越しいただきました。これはマエニワの様子で、賑わい創出イベントの「ヨルニワ」で音楽イベントを開催しました。キッチンカーが出店して、ジャズ演奏もあって、壁に映像を投影し素敵な空間を演出しました。こちらはアートファーマーの建築ガイドツアーの佐々木美保さんが友達と企画して、美術館共催で行った「MEETIUM」です。たくさんあり紹介しきれませんが、私の方からはこれで終わります。資料1-2から資料1-4についてはご覧いただきまして、質問いただければと思います。いったん私からは以上です。

- ◆会長： ありがとうございます。昨年度の活動を写真と一緒に報告していただきました。本当に色々なバリエーションがある展示のほか、ジャイアントルームやアートファーマーの活動、様々な連携や屋外でのイベントなど、この美術館ならではの活動がたくさんあったなという感想です。この後議題もありますので、最後の方にまとめて委員のご感想、ご意見をお伺いすることで進めてまいりたいと思います。では続きましてこれから議事に移ります。議題1の令和6年度事業計画について事務局から説明をお願いいたします。

#### 議題 令和6年度事業計画について

- 館長： さきほどの報告事項について補足説明いたします。最初にお話した「美しいHUG!」という展覧会については、お手元のフォトブックに会場の様子を写した写真を掲載していて、もう一つテキストブックに色々なトークやドキュメントなどを掲載していますので、後ほどご覧いただければと思います。

では、令和6年度事業計画について概略を説明させていただきます。資料2をご覧ください。まず、1の課題についてですが、建築物ができて4年目になり、オープンが令和3年11月でしたので今年の11月で丸3年が経つということで、開館してからは現在3年目の途中というような状況であります。1つ目は最初の3年間で中期運営計画ですので、11月以降の運営協議会に向けて、次期中期運営計画を構築していくことにしております。2つ目は、アート版地域包括支援センターとしての役割ということですが、今日ご欠席されている熊倉委員からはこのよ

うなお話が以前にあって、最初の3年については、まずは色々なインパクトを示していこうということで進めてきましたが、ここからは改めて地域に対して、この美術館がどのような活動ができるのかということを考えるという意味合いも含めて進めていきたいと思っています。3つ目は八戸市民発の多様な芸術活動の創出ということで、今ちょうどスライドに映っている「MEETIUM」という企画は、地元の高校生が美術館について考える場を企画したいということで、それを美術館がサポートするような形で1回目をやり、これから2回目の準備をしていくところです。こういった形で市民の方からこういう企画をやりたいというようなことが少しずつ出始めているので、それを後押しするようなことをやっていく必要があると思っています。また、周辺施設のはっちやブックセンターですとか、今、「AOMORI GOKAN アートフェス」が始まっていますけれども、青森県だけでなく、市内のそういった文化施設とより密接な連携を取ることができればいいと考えております。2の展覧会については、今年の11月で丸3年が経ちますが、3つのインパクトの総まとめとして、今年度前半についてはアートフェスの一環である「エンジョイ！アートファーム!!」として、地元在住の5人のアーティストを招聘してプロジェクトを進めています。アートフェスについては、ガイドブックがございますので、後ほどご覧いただければと思います。また「展示室の冒険」についても、お荷物になりますけれども、図録をお渡ししています。展覧会はこの土曜日からのオープンになりますが、ほぼ完成しておりますので、お時間あればご覧いただければと思います。このような形でこの3年目の最後のまとめとして企画を進めているところです。今年度後半については、4年目以降に向けて「八戸アーティストファイル」というかたちで、地元のアーティストを紹介するような展覧会の企画を考えております。秋には教育版画展を予定しており、コレクションを紹介したり、八戸のアーティストを紹介してまいります。アートファーマープロジェクトにつきましても継続して実施してまいります。裏面にありますけれどもコレクションについては、以前お話したのとあまり変わりませんが、引き続き、展覧会、収集などを進めていきます。学校連携、大学・高専連携についても同様に行ってまいります。私からは以上になります。

○事務局： それでは令和6年度八戸市美術館運営事業について、資料2-1をご覧ください。事業概要としましては、令和3年11月3日に開館した新美術館について、「出会いと学びのアートファーム」としての運営を図ることにしています。開館3年目は「第三の開館」と位置付けまして、美術館と市民との新しい共創の場の在り方を一緒に考え実践する年にいたします。6年度の主な事業内容につきましては、美術館の企画運営についてですが、予算額5,818万7千円がついています。企画展、巡回展、コレクションラボを開催するほか、各種プロジェクトを展開することとしており、主な内容としましては、展覧会開催経費、令和7年度以降の展覧会準備にかかる経費、プロジェクト実施にかかる経費、収蔵作品の修復、調査研究等にかかる経費、「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」開催にかかる経費となっ

ております。そして施設の維持管理につきましても、予算額1億6,514万8千円  
ついております。こちらは、展示室や収蔵庫の空調環境を整えるとともに、施設  
の適切な維持管理を行うことにしており、主な内容としますと、光熱水費、清掃・  
警備等業務委託、総合案内業務委託、施設・設備の保守点検、施設の修繕になっ  
ております。美術館の管理運営ですが、予算額4,997万3千円で、日常的な施設  
管理や貸館業務などを行うことになっており、主な内容は貸館業務、備品購入費  
などになっております。私からは以上になります。

○事務局： 企画グループリーダーの松倉でございます。私からは八戸市美術館の令和6年度  
の企画についてご説明いたします。資料2-2をご説明したいと思います。まず  
(1) 展覧会の概要でございますが、収蔵品をより深く味わうコレクション展を  
はじめ、人気の高い巡回展や、当館のコレクションの中でも人気のある教育版画、  
八戸地域の作家を取り上げる展覧会を開催いたします。まず企画展の主な内容で  
ございますが春の企画として、「展示室の冒険」を開催いたします。再開館後2回  
目となる収蔵品のコレクション展でございまして、来場者の方々が作品との出会  
いを楽しみ、一点一点を味わえるような鑑賞体験を提案いたします。会期は表に  
しておりますのでここでは省略させていただきます。次に夏の企画でございませ  
が、巡回展「tupera tupera (ツペラツペラ) のかおてん。」であります。絵本やイ  
ラストレーションを中心に活動する tupera tupera (ツペラツペラ) による、「顔」  
をテーマにした企画でございまして、全国巡回している展覧会でございます。こ  
ちらの主催は地元の青森朝日放送、共催として八戸市美術館が入ります。秋の展  
覧会といたしまして、「風のなかを飛ぶ種子 青森の教育版画」を開催いたします。  
本展では、当館が所蔵する八戸での教育版画作品を中心に、八戸の教育版画が生  
まれる礎となった青森県内の版画教育の実践を紹介いたします。また、並走する  
プロジェクトとして、招聘アーティストとともに市内の子どもたちが制作した作  
品を展示いたします。招聘するアーティストは京都を拠点として活動している、  
THE COPY TRAVELERS(ザ・コピートラベラーズ)となります。次に冬の展覧会でご  
ざいませが、こちら初めての企画になります「八戸アーティストファイル展」で  
ございます。八戸圏域に在住、または出身の表現者を紹介する展覧会で、出展す  
る表現者は、市内の民間画廊やギャラリー、画材屋、私立美術館など、表現者を  
よく知る地元文化人が推薦者、審査員となって選定します。これまで、地元で紹  
介されることが少なかった八戸出身の表現者の方々を、今回美術館として取り上  
げることで、広く八戸のアートシーンの「今」を紹介したいと考えております。  
出展者はやはり八戸ということで8名と考えておりまして、地元在住の方6名、  
出身者の方2名を考えております。また、数年に1回の開催を想定しておりまし  
て、定期的な開催を目指しているところでございます。次に現在開催中でござい  
ますが「AOMORI GOKAN アートフェス2024 メイン企画」で「エンジョイ！アート  
ファーム!!」となっております。漆畑委員にも、出展していただいておりますが、  
県内5つの美術館、アートセンターが実施するアートフェスの一環として、当館

のコンセプトであります、「出会いと学びのアートファーム」を体現する企画を実施いたします。ジャイアントルームで、市内に在住する5人のアーティストが来館者とともにつくり、楽しむプロジェクトを実施しております。絵画、版画、写真、ダンスなど多様なジャンルのプロジェクトを繰り広げます。その次のページへまいりまして、「八戸市美術展」を開催いたします。昨年、一昨年に引き続き、八戸市文化協会との共催により、文化協会会員を中心とする展示に加え、広く市民や若手アーティスト、学生などの作品発表の場を提供します。次に常設展に相当いたします、コレクションラボでございますが、収蔵作品の中から厳選した作品を毎回テーマを設定いたしまして、多彩なコレクションに気軽に触れられる機会を提供いたします。今開催中の八戸市の文化人であります大久保景造を紹介する「大久保景造と八戸文化」。次に「彩る書」ですが、八戸は書が非常に盛んな地域でございます、書を感じ、楽しみ方を探るといような展示をいたします。次に、「リビングルーム」という名称で、ラボ内に家具を置いてリビングルーム風にした展示室に、収蔵作品を展示いたしまして、暮らしの中に美術を取り入れることを提案したいと考えております。最後に年度終わりには、「新収蔵作品展」を予定しております。新規に収蔵作品を収集した後に展示する展覧会としたいと考えております。これまでご説明いたしましたスケジュールは以下のようになっております。

次に(2)のプロジェクトになります。①のアートファーマープロジェクトにつきましては、開館後、これまでアートファーマーと美術館スタッフが一緒に、美術館での学びを活かして、アーティストとの共同創作活動や来館者へのガイドなど、美術館と人、作品と人、人と人をつなぐ様々な取組を展開しております。裏面にまいりまして、主なアートファーマープロジェクトですが、下から二つが本年度から追加されたものでございます。「(仮称)美術館広報部」としてありますが、アートファーマーからなるメンバーによる、SNSなどでの美術館の情報発信やガイドブックの作成を行います。次に「(仮称)ものづくり部」であります。館内にもものづくりができる場所をつくとともに、中心街での中高生の活動場所としての活動を推進します。次に②学校連携プロジェクトです。三澤委員にも参画いただいておりますが、教員、学芸員、専門家がつくる「学校連携プロジェクトチーム」では、美術館を活動拠点に学校の授業で役立つツールやプログラムづくり、学校教育だけでは実現できない取組を行ってまいります。

③大学・高専連携プロジェクトにつきましては、堤委員がご在籍の八戸学院大学様、市内の大学・高専が有する専門性と美術館の専門性を掛け合わせて、社会人と学生と一緒に学び、社会で実践できるプログラムを展開してまいります。昨年度に引き続き、美術館のアクセシビリティを高める取り組みを進めたいと考えております。(3)のその他でございますが、八戸市独自の事業であります、市と市民活動団体が協働で事業を推進する「元気な八戸づくり市民提案制度」において、八戸歴史文化発信事業実行委員会という、私設の八戸クリニック街かどミュージ

アムが事務局をやっております団体と、「共に創る！アートのまちづくり魅力発見事業」を行います。美術館の「共創パートナー」を募り、各々で行われている文化イベント情報を紹介・連携する取組を行います。LINE を利用したイベント情報発信や、ホームページ「はちのへヒストリア」との連携、「街なかアートマップ」の作成・配付、パートナーミーティングなどを行ってまいります。以上、駆け足で進めましたが展覧会やプロジェクトの詳細は、資料2-3から2-9にまとめておりますので後ほどご覧いただければと思います。私からは以上です。

◆会長： 令和6年度の事業計画について事務局から説明いただきました。では委員の皆様からご意見をいただきたいと思っております。今年度の事業計画、そして昨年度の事業報告なども含めて、委員の方々それぞれ、大学や地域と美術館の連携事業も今年度計画されていますので、そのあたりも含めて、ご意見をいただければと思います。

◆委員： この美術館を開館前から見てきて、この美術館が最初から理想として色々考えてきた部分のベースになるものを3年間で本当によくやってこられたなというふうに感じました。この美術館の一番の基本であるラーニングを核としたものと、地域の作家やアートの資産も含めてきちんと受け継いで、みんなでつないでいこうという基本的なスタンスが、この3年間の事業の中で出来てきたのではないかと思います。本当にたくさん事業をやっていらして、職員の皆さんが疲弊しないかなと心配になります。美術館は5年とか10年ぐらい経ってようやくその美術館の個性がしっかりと育ってくると思うので、これからも一つ一つの事業を大事にしながら、あまりやりすぎることがなくって言うとおかしいですけども、その辺りをちゃんとやっていくといいのかなと思いました。それからこれからの事業だと、今年は教育版画の展覧会をやられるということで、前の美術館の最後の展覧会でもありましたし、また教育版画に関しては、八戸市美術館や県立美術館が手をつける前に、町田市立国際版画美術館が開催していますので、地元としては悔しい思いもありますけれども、いろんな形で関心が広がっているところもありますので、ぜひこの展覧会を大事にさせていただきたいと思っております。「虹の上をとぶ船」の作品はジブリの「魔女の宅急便」の中に出てくる絵のもとになっていますし、また宮崎駿さんの奥様のお父さんが、大田耕士さんという教育版画の指導者だった方なので、そういった意味で、今の時代の中で注目が集まってくるところだと思います。教育版画に関してはこれまでやってきたことを踏まえて、今の社会とか、あるいはもっと広いところに視点を広げながら、皆さんに紹介していくような、そういった展覧会になってくれればいいなと思っております。「展示室の冒険」も「エンジョイ！アートファーム!!」もすごく面白くて、この美術館らしい展示の仕方になっていて、漆畑委員の作品もとても面白い形で展開されていますので、すごくいい感じで地元のコレクションあるいはアーティストを紹介するという形ができてきたのではないかと感じました。私からは以上です。

◆会長： はい、ありがとうございました。では次の委員どうぞ。

◆委員： はい、ありがとうございます。どのプロジェクトの取り組みもすごく力を入れて取り組まれていて、一つ一つが完成度高く進んでいるなという印象を受けました。いくつか質問ですけれども、例えば達成目標とされている入館者数に十分達成できていたか、数値的な達成具合がどうだったのかというのが一つです。もう一つは最初のコンセプトの中で、エデュケーションとかラーニングという言葉が強かったと思いますが、中高生や小学生について、プロジェクトとして取り組んでいるんですが、入館の割合としては少し少なめかなという感じがします。東京のアーティゾン美術館は大学生まで無料にしています。大学生まで無料にすることは難しいかもしれませんが、高校生が5%しか入館していませんので、その5%の高校生を無料にしてみても、中学生から高校生まで美術館に来やすいようにしてはどうでしょうか。大学生ぐらいになると美術館に戻ってくるんですが、中高校生になると切れちゃうっていうのがあるので、その地続き感みたいなものをどうやってつくっていくのかということが、計画の中で一点必要なポイントかなと思いました。あとは今5館連携ということで、いくつかの美術館との連携しているところだと思いますけれども、八戸市美術館は ICOM（国際博物館会議）加盟美術館でしょうか？

○事務局： 今年度申請をするところです。

◆委員： ICOM で繋がっていると、いわゆる誰でもなれる会員ではないので、ある程度の美術館・博物館の専門家の人たちが巡回して見て回っているんで、ネットワークに入ることが非常に有益なことかなと思いますので、その対応がどんな感じかなというふうに思った次第でした。そのあたり何かご回答があればなと思いますがいかがでしょうか。

○事務局： 目標の来館者数について上回っているのかどうかでしたけれども、目標を9万人としていますが、10万人を上回りましたので達成しております。

◆委員： エデュケーションとかラーニングっていうテーマがあったので、中学校、高校、そして大学っていうふうに繋がっていくときに、高校生にもうちちょっと関心を持ってもらうために高校生くらいまでは例えば無料でもいいのかなと思ったんですけど、そのあたりどのように考えていますか。

○事務局： 観覧料につきましては、市主催の展覧会については、高校生以下は無料にしております。高校生にもプロジェクトに参加していただいて、「建築ガイドツアー」であったり、「タノミマス」だったり、「あそらぼ」という、プログラミングの要素を取り入れた手づくりでゲームをつくる企画にも高校生が参加したりしています。その高校生たちは進学しても美術館に興味を持っていて学芸員をやりたいっていう人もいるなど、繋がりは強いのかなと感じています。

◆委員： ありがとうございます。

◆会長： はい、ありがとうございました。そうですね。小さいときに美術館に行ったことがあると、大人になってからも美術館に対する敷居が高くなって美術館によく行きますよ、というアンケートも見たことがあります。小さいときに親に連れ

て行ってもらったとか、アウトリーチとして学校単位で行ったことがある経験があることは、その人の人生の中で美術館というものが身近なものになっていくということはよく聞きます。八戸市美術館はジャイアントルームという装置があるがゆえに入りやすい美術館だと思うので、そこを最大限に活かすといいのかなと思います。では、次の委員よろしくをお願いします。

◆委員：

私は毎日のようにここに来ていますので美術館の職員のようなものです。委員という認識はあまりないんですよ。委員の方々もみんな兄弟みたいなものだと思います。そこに「赤い牛舎」という私の絵がありますが、こういう絵を描いています。2、3日前に、来館した人が「この広いジャイアントルームに絵が飾られて嬉しい」と言っていました。ここに絵を飾って欲しかったという市民のいい意見をもったなと思って、ぜひともこの場でお話したいと思っていました。しかも私の作品がちょうどいい具合に委員の皆さんが集まったときに飾られています。普段は車庫の2階に積み重ねておりますので、今日こうして先生方に見ただけのはとても有難いです。厳しいご指導をよろしくをお願いします。こんなの飾っちゃだめだとかね、コメントをいただければと思います。私は委員というよりも、美術館の共同運営者みたいなものだと思います。市民が集ういい場所になるように、一つ一つ積み重ねていただきたいなと思います。去年も言いましたけど、有名な人の作品を持ってきて欲しいなと思っています。藤井フミヤ展は1万人を超えたそうですが、どなたか東京の有名な画壇の方とか、日展を引っ張ってこられないかと考えています。日展を八戸の人は見たことがないと思うんですよ。以上です。

◆会長：

はい、ありがとうございます。では、次の委員をお願いします。

◆委員：

私からは3つの観点でお話させていただきます。1点目として、八戸市美術館がアートファームということを標榜して、全国的にも全く挑戦的な、新しいコンセプトの美術館として始まったわけですが、開館前から私も関わっており、2年から3年にかけて見続けてきた立場で、それが実際にどうなったのかというところを大変興味深く見えています。いわゆる有名なコレクションで勝負する美術館ではないわけなので、やはり学芸員の個性だったり、エネルギーだったり、力が試される場所に重きを置く美術館なのだろうと思っています。そういうことで言いますと、案内をもらったときの資料を見て仰天したんですよ。今は新しい資料を見て、学芸員の名前がちゃんと書いてあって疑問は解消されたんですけども。最初の資料では、学芸員って肩書しか書いてなくて、学芸員の名前が書いてなかったのびっくりしました。やはり学芸員がもっと表に出て、学芸員自身が、いろんなことを創意工夫することが大事だと思っています。今日も「展示室の冒険」を見させていただきましたけれども、とても面白いアイデアだと思います。篠原学芸員が担当していましたね。ああいったことを見るにつけて、まさに学芸員は、展覧会を構成するプロデューサーだと思いました。名前を表に出して、その評価を学芸員も負うっていうぐらいの気概を持ってやっていくと違うんじゃない

かと思います。もちろん組織みんながやっているわけですから、1人だけ責任を負わせるわけではないんですけども、やはり学芸員がもっと主役に立つ美術館であると、当初のコンセプトがもっと生きるのではないかと思います。2点目としましては、いろんなタイプのワークショップがあったり、「美しいHUG!」から始まって、展覧会があったりするわけですけども、その中で私が注目したいのは、単なる視覚芸術をそのまま見せるのではなくて、もっと立体的に考えていいのではないかと思います。それはもちろん映像があったり、あるいは音楽を合わせたり、パーティーみたいなのがあったりして大変面白い。ある種アートの広がり感というんでしょうか、アクセスポイントを広くとって色んな人を巻き込むことができる仕掛けになっているんじゃないかと思います。そういった意味では、相当におやりになっていると思うんですが、これからの計画を見させていただきますと、意図はわかるんですが、音楽がないとか勝手なことを思ってしまったりました。例えば「リビングルーム」って企画がありますけれども、リビングルームっていうと、僕なんかサティを思い出すわけです。家具としての音楽っていうのがあったりするわけで、そういった音楽がふうっと流れてくると、つじつまがあってもっと立体的に感じるっていうことがあります。そういった工夫をやっていながら、企画を平面的、二次元的にやるだけではなくて三次元的にやる、あるいは映像的なものも、今はアートの中にどんどん入ってきているので、そういったものを意識することが大事じゃないかと思います。そのときにキーワードとなる言葉を申し上げておきたいんですけども、イマーシブって言葉が今流行っております、イマーシブって何かというと、要するに没入感ですね、あるいは昔でいうと臨場感と言ったらいいんでしょうか。そういったものを今若い人が非常に求めている、イマーシブ・フォート東京が流行っているというのも、そういう証左かもしれません。そのようなことも何となく意識した形で展開されたら、さらに面白いのではないかと思います。

3点目ですけども、連携というところで申し上げますと、今回5館連携がとても面白いなと思って見させてもらっています。一館単独で勝負していく時代ではなくて、青森県全体として行うということが大事だと思います。文化観光推進法ができていますけれども、その文化観光については、東北はちょっと弱くて、関西などに負けているわけです。インバウンドもそういう意味でいうと、文化観光の一つの大きな核になるプラットフォームとしてのこの美術館の有り様が問われてくるんじゃないかと思います。それが5館連携の中で展開しようとしているというのはとてもいい試みだなと思います。ぜひともそれに乗っていく、そしてそのときに八戸ならではのコンテンツは何なんだということを強く打ち出して、5館連携の中で最も印象に残って、また行きたい美術館と思わせることをちゃんと狙っていくことが、これから大事じゃないかなというふうに思う次第です。最後に、これは質問ですけども、事業費5,800万円の予算はどういう意味ですか。支出ベースですか、それとも入場料も含めた総事業費ですか、それ

とも入場料は別ですか、わからないので後で教えていただきたいと思います。以上でございます。

◆会長： はい。ありがとうございました。後ほど5,800万円の予算について入場料が入っているのかいないのかお答えいただきたいと思います。

○館長： ご意見ありがとうございます。1点目の担当学芸員については、担当学芸員が入っている企画については広報物と会場の入り口と、販売物に全て明記するようにしています。また、「artscape (アーツスケープ)」というWebマガジンに学芸員が連載を持たせていただいています。むしろ誰が担当したかを明示しております。あと2点目の音楽の話も、今開催している大久保景造展では中にレコードプレーヤーを置いて、大久保景造さんが関わった音源を流したりしています。できるだけアクセスポイントを増やすということはまさにその通りだと思います。

○事務局： 5,800万円の予算につきましては歳出ベースの額です。また、先ほどのICOMの登録の話でしたけれども、博物館登録制度における登録の勘違いでした。

◆委員： ちょっとはっきりわかりませんが、例えば、ロートレック展の仕込みに1,000万円かかりました。入場料が500万円入りしました。そうすると1,500万円ってというのは事業費ですよ。そういうことでここに書かれているのか？それとも支出ベースの市でついた予算がここに掲載されているだけなのか？それを教えてください。

○事務局： 入場料は別で、支出ベースの予算です。

◆委員： 了解しました。

◆会長： では続きまして、次の委員お願いいたします。

◆委員： 昨年度に引き続き、今年度も大学資産を活用したアートの学び事業に関わらせていただきますが、委員の皆様のご意見を参考にさせてもらって、大学・高専連携プロジェクトを進めていきたいと考えております。昨年は、副館長からご説明ありました通り、社会人と学生が一緒になって進めるワークショップを3回シリーズでやりました。国際交流をテーマに、健康、幸福、福祉といったような、ウェルビーイングをサブテーマにして、1回目はトルコの先生をお招きしてスタートして、2回目は地元の和菓子職人の方に来ていただいて実際に和菓子づくりをして、3回目はウクライナの先生方をお招きして、世界と一つに繋がろうということで、オンラインとハイブリッドでやらせていただきましたが、1回目、2回目に参加してくれた地元の八戸高校の生徒さんたちがウクライナの先生とお話できる機会があるのであれば自分たちの発表をしてみたい、ということで急遽3回目のプログラムを縮めて高校生に発表をしてもらいました。その中で、実は高校生たちは初めて美術館に来たということで、こういう場であれば敷居が高くないということで、今度また自分たちも友達と一緒に美術館に来ると言っていました。やはり先ほど小さな頃から美術館に触れていると敷居が高くなるという話があったように、まさにその通りだったなと実感しました。なおかつスイスの大学ですとか、イギリスの大学の先生方も、八戸高校の生徒さんの発表を聞いて素晴らしいとい

うことで、別枠でもっと八戸のことを知りたいということと、こちらも向こうの状況を知りたい、まちづくりのことを知りたい、地域づくりのことを知りたいということで、別なステップができたというのは、アートの学び事業に関わらせていただいて大変感謝しております。その後、まちづくりや地域活性化をテーマにしている八戸学院大学の公開講座を2階のサテライトキャンパスでやったときに、参加した高校生が美術館を気に入って、この美術館をもっと理解したいという話が出ましたので、今年度は高校生と一緒に大学・高専連携の中でアートの学び事業を考えていきたいと考えています。先程、八戸ならではのコンテンツというような話もありましたので、私達もその辺を意識しながら、工大の先生、高専の先生と一緒に、アートの学びのワークショップを改善するなど、よいものをつくっていききたいなと思います。

◆会長：

では、馬渡委員、お願いします。

◆委員：

他の委員が発言されていること以外のことを話そうと思います。今までの経緯を振り返ってみますと、美術館の事業の肝である学校連携とか、高専と大学の連携で言いますと、八戸学院さんが主導する形になっていまして、どうしても私達高専がなかなか積極的に関わっていないということを感じていたところです。本日の資料を拝見していると、「美しいHUG！」の展示だと思うんですけども、アイアンのオブジェを置いて溶接していたり、英語で建物を説明していたりするのを見て、自分たちの学校でやっているのと一緒にだなぁと思ったりしました。個人的には先日、大久保景造さんの展示を拝見したときに、岡山良一さんっていう八戸市の美術家、私は建築家として認識していますが、そういった方々を取り上げていて、工学とアートはなかなか結びつきにくいんですけども、何かしら高専が美術館に関わっていける機会があるのではないかと感じていたところです。館長には客員教授として関わっていただいています、より一層関係性を深めていくような活動をしていききたいなと思います。関わる方々が特定の方に絞られてきていると思っていますので、例えば学校に来ていただいて、美術館ではこういう活動をやっていますみたいなことを、若い教員にプレゼンしていただくとか、学校との連携を活性化していく可能性として、ぜひ色々ご相談させていただきたいと考えています。

◆会長：

はい、ありがとうございました。次の委員、よろしく願いいたします。

◆委員：

3年間素晴らしい活動をなさっており、非常にユニークで特色ある美術館になりつつあると思います。私からは教育の面から少しご質問と意見を言わせていただきます。質問は、先ほど5,800万円の予算の中で学校連携の予算はいくらでしょうか。

○事務局：

学校連携の予算はこの中に入っていないです。

◆委員：

学校連携の予算はいくらぐらいですか。

○事務局：

すぐ出てきませんので、今確認します。

◆委員：

学校連携は地味な仕事です。子どもは八戸に何人いますかね。小中1万5000人く

らいですかね。子供の家族まで含めたらどのくらいですか。4万人くらい、5万人くらいかな。つまり、学校の1人1人の子どもの背景を考えたら5万人の家族がいるわけです。学校に美術を働きかけることによって5万人に美術が伝わる。実際に美術館の方が学校に行って授業されたことはありますか。先日、島守中学校に行ってきましたが、美術館にはなかなか来ないと思います。長者中学校にも行ったことありますが、スポーツは盛んですが、美術館には関心がなさそうです。そこをどうやって美術館に子どもたちが自分から来るように美術館にいざなうかというのが、この学校連携チームの仕事なのです。そのためには、まず重要なのが人です。それを担当できる人がいなかったら動きません。担当できる人は、教育委員会を熟知している人でなければアプローチできません。私は様々な学校に行っていますが、学校には学校独自の文化があってなかなか関係者以外入れません。そこをどうやって美術館と繋げるかがポイントになってきます。地味な活動になりますが、時間をかけるしかないです。1万5,000人の子ども、そしてその背景にいる5万人の家族に、どのように美術の楽しさを伝えていくかを考えたときに、メディエーター（仲介者）になるのは学校の教員なのです。ということは先生たちに美術館の魅力を感じてもらわなければ子どもたちに伝わらない。となると、美術館は教員に対して十分に働きかけができていますか。働きかけをするには、やはり教員を経験した人、大人の気持ちが分かる人、また教育委員会のシステムが分かる人、そういう人に入ってもらわなければ、いくらお金をつけても動きません。逆に言うと、お金がなくてもそのような人がいるだけで動くのです。これは長野県のある自治体の美術館の話になりますが、そこもなかなか美術館に対して教育委員会が動かないので、市長部局の文化振興課が、教育委員会に働きかけて予算をとって朝鑑賞を始めました。朝鑑賞というのは、各学校で学校の教員が、朝に子どもたちに絵を見せることですが、週に1回10分間、その結果1年、2年やっていると子どもたちは美術に対して関心を持つようになるのです。学校や日常生活では楽しいこと、やらなければならないことがたくさんある。ゲームがあるし、スポーツは楽しいし、勉強もしなければいけない。美術に対する興味は何番目ですかね。そのような美術に興味がない子どもたちに学校で朝の時間に担任が絵を見せ対話したりする、それによって子どもたちは確実に美術に関心を持ってきます。ただこれはすごく時間がかかります。それにはまずメディエーターとなる教員を育てなければいけません。学校の先生はなかなか鑑賞をやりたがりません。絵を見るのが怖いんです。子どもたちに質問されたらどうしようとか、子どもたちが沈黙したらどうしようとか。これは私がこれまで数多く研修をしているのですが、ほとんどの学校で出てくる意見です。沈黙したらどうしたらいいですか。どのように発想したらいいですか。つまりこのような質問に対しても美術館でサポートしていく必要があるだろうと思っています。今日展覧会を見て、展示が作品の見方を楽しめようにアプローチされていると思いました。各クラスの担任が子どもたちを美術へいざなうことができれば、子どもたちは興味を持つ

て八戸市美術館に来ます。夏休みも。普段は来られないかもしれないけど。お母さんに連れてって言いますよね。そこまでやらないと将来の美術館や愛好者は育たないのです。「早い年齢から美術館に親しむ体験をさせましょう。バスで美術館に連れてきました。見せました。」だけだと、興味を持っていない子どもたちは何を見ていいかわからない、どのように見ていいかわからない。その前に我々が鑑賞の手法について知見を高めて、学校と関わって子どもたちを育てられるようなプロフェッショナルを育てて、それで長期的な展望の中で、美術館を支えていかないと難しいんじゃないかなと思います。学校の先生方は皆さん熱心に美術館のために様々なことやってくださっていてありがたいです。ただ、本務は学校の先生ですから、そっちがメインになってくる。その先生たちを支えられるような美術館の専門家、職員としての専門家を早く養成して行かないと難しいという気がしています。まず、今言ったような専門家、とにかく長期的に関わって研修を積んで頂き、優秀なエデュケーターとして育てていかないと難しいかなと思います。ぜひそこはよろしくお願いします。

- ◆会長： はい。ありがとうございました。先ほどの数字は出ますか。
- 事務局： 学校連携の予算ですが、令和6年度は119万3,000円です。
- ◆委員： 具体的に何に使われますか。
- 事務局： 講師謝礼、職員の旅費、研修費、消耗品、活動報告の冊子をつくることで予算をとっています。昨年度は、先生方がいつでも美術館を使っていたり、会議室を学校連携ラボとして場所づくりに取り組みました。備品がなかったので、プリンターとかパソコンを設置する予算を組みました。
- ◆委員： 場所を用意していただけるのは非常にありがたいんですが、そこに常駐して先生方と関係をつくっていただけるような職員が必要なんです。とにかく人です。人に投資してください。
- 事務局： 昨年度は、教員OBが学校連携コーディネーターとして働いていました。今年度は教員出身ではないんですけれども配置しております。昨年元教員の方に朝鑑賞でも繋ぎ役として活躍していただきました。今年度から何校か朝鑑賞を実施してくれることになりました。今お話したように学校連携に力を入れておりまして、三澤委員にも何度も足を運んでいただいて、学校現場に声をかけて、朝鑑賞の講習会を開催するなど、今までにない取り組みをしていると思います。先生方には、展示会のチケットをお送りして、足を運んでいただいています。
- ◆委員： 学校の先生と言葉が通じる人を配属いただけるようお願いいたします。
- 事務局： ご意見を参考に、検討してまいります。
- ◆会長： ありがとうございました。では、次の委員お願いいたします。
- ◆委員： 勤務校では美術部の顧問を担当しており、八戸市美術館をよく利用させていただいています。美術部の生徒と企画展のたびに見学に訪れたり、美術館新聞部で新聞制作にも携わっています。また、昨年は一度だけですが、建築を学ぶ高校生を連れて美術館の建物見学を行ったところ、生徒たちは非常に喜んでいました。美

術館には多くのアイデアを提案し、様々なことを受け入れていただいております、今後も一市民として多くのアイデアを実現できるような環境を整えていただけるとありがたいです。

今日の会議の中でも「地域の中高生にもっと美術館を利用してほしい」ということが話題になりましたが、高校生を指導する立場として感じるのは、現在の高校生は非常に忙しいということです。授業や放課後講習、資格取得、課題研究、探求の時間、部活動に加え、スマートフォンで友達とLINEしたりゲームをする時間も必要で、余裕がないように思います。本校の生徒を見ていると、スマートフォンが高校生活の中で大きな存在になっていることがわかります。その中で、彼らは二次元の生活を送りつつも、美術館に来ると珍しいものを見て非常に喜んでいきます。学校関係者として、美術館に来るきっかけをつくっていく必要があると感じています。

また、美術館に対して2点お願いがあります。1点目は、アートファーマープロジェクトの新しい試みである「ものづくり部」が非常に良いと思っています。絵を見るだけでなく、中高生がものづくりを体験できる環境を地域全体で支えていかなければならないと強く感じています。以前ほどの学校にも美術部があり、絵が好きなお子たちが創作活動を楽しめる環境がありましたが、現在は美術部のある学校が非常に少なくなり、文化部自体が縮小しています。中学校や高校で美術が好きなお子たちが十分に楽しめる環境が弱まっています。

高校に入学した1年生も「美術部なんてあるんですか」と驚くことが多いです。中学校でも美術の教員が減少し、高校でも部活動を指導できる常勤の教員が少なくなっています。地域全体で美術が好きなお子たちを支えていく必要があると感じています。もちろん絵を鑑賞することも大切ですが、ものづくりの場を美術館でも設け、私もその一員として協力したいと思っています。

2点目は、中高生の活動を積極的に広報してほしいということです。美術館でこんなことができるという情報を、中高生や学校の教員に伝えていく必要があります。多くの教員は未だに美術館を「絵を見るだけの場所」と認識しているように感じます。八戸市美術館が新しい取り組みを行っていることを、学校の教員にも知ってもらうことが重要です。中高生が美術に親しみ、将来八戸に戻ってきて地域を盛り上げる立場になったり、あるいはこの美術館で作家として展示を行うようになるかもしれません。学生を大切にしていきたいと思います。

以上です。

◆会長： はい、ありがとうございます。では次の委員お願いいたします。

◆委員： 今日、展覧会を見せていただきましたけれど、今まで手探りで新しいことにも取り組みながらここまで頑張ってきて、だんだんに自分たちが保存・維持しているものと、学芸員の力と市民との連携の力と、そういうものが熟してきて、これからいよいよ本領発揮という感じの展覧会に今回はなったなと思っています。ここから八戸市美術館の本領発揮の時期に入っていくんじゃないかなと思っています期待して

います。今までもコレクションラボや小さな展覧会でもコレクションを大切にしている、普通の展示だったら気づかないことを気づかせ、新しい視点を引き出してもらえそうな、上手なアプローチをそれぞれしていたと思います。でも今回はもっと、作品と積極的に対話できるし、作品だけじゃなくてそこに一緒に見ている人とも対話したくなるようでもあり、コレクションラボも含めてそんなふうになっていて本当に素晴らしいなと思います。この美術館が何を目指しているのかをここまで忘れずに初心を大切にしてきた成果かなと思います。またたくさんやっている色んなプロジェクトに非常に多様な人が参加していて、とてもいいなと思いますので、どんどん膨らませていただきたいと思います。

今年度の事業の中にアクセシビリティの強化っていうのが出てきているんですけども、事業案を見ると、アクセシビリティの方向性についてちょっと心配だなと思うことがあります。例えば障がい者とか高齢者とか、そういう人たちをケアしなければならないというような目線でアクセシビリティを考えているのではないかなと思われて、ちょっと危うさを感じます。アクセシビリティは、何か障がいがある人を補助してあげるという視点ではなくて、当事者にどんどん話をしてもらって、美術館で彼らがどんな感動を得ているのか、どんな感覚で訪れているのかを知ることが大切だと思います。三澤委員から、大事なものは「人」だという話がありましたが、これはまた違う「人」の問題ですが、バリアをつくってしまうのも「人」なので。たとえば、目の見えない人は、目の見える人と同じように作品を楽しんでいるわけじゃないと思うんですよ。全く違うセンサーでそれを捉えていると思うので、むしろ我々の方が、彼らがどういうふうにもものを感じているのかっていうことを知っていくことの方がずっとアクセシビリティのハードルを下げることに繋がると思っています。福祉の現場ではみんなケアラーになりがちで、そのために逆に当事者がバリアを感じることもあります。美術館みたいなところは大胆な発想で立場の逆転ができる場所だと思うので、逆の発想でアクセシビリティを強化していくということが必要じゃないかと思います。ここまで色々なことやってきたのでできると思うんですよ。高校生もこういうふうに活躍しているし、若い世代は認知症の人のこととかも、私達の世代よりもちゃんと理解していたりします。認知症の人が感じたり理解したりできなくなるわけじゃない。みんな感性が違うし、症状も違う。そうすると、耳が聞こえない、目が見えない、認知症であるとか、障がいを十把一絡げに考えがちだということを知り、それぞれの人をどう対応するのが今の大きな課題だと思います。だから当事者がどういうふうになら感じているのか、考えているのかっていうのを、みんなが聞くような場を、作品を通して、あるいはアートファーマーの活動を通して知っていると、本当に全ての人にとって、美術館が居心地の良い、毎日の生活とは違う新しい視点とその時間を発見できるような場になっていくと思います。ぜひ、アクセシビリティはそういう方向で強化して行ってほしいなと思います。

◆会長：

はい、ありがとうございました。各委員から議題1について今年度の事業計画に

ついて感想ご意見いただきました。事務局ではご意見いただいたものを反映させながら進めていっていただければと思います。続きまして議題2の方に移ります八戸市美術館中期運営計画について事務局から説明をお願いします。

○事務局： それでは資料3-1 八戸市美術館中期運営計画に基づく評価及び改定についてご説明いたします。中期運営計画は令和2年3月に策定いたしました。開館から3年間の目標設定や、その評価方法や重点的に取り組む事業を定めております。しかしながら半年遅れてグランドオープンしたこともありまして、その期間のずれがあるということで、3年目の実績を反映した上で正しく評価するために、令和5年度に想定していた評価・改正時期を今年度に変更して、次期計画の運用を7年度からにすることで、前年度末に委員の皆様にご相談させていただいておりました。今年度は評価をする年になっており、また7年度からの中期運営計画を定めていく年でもあります。そこで評価指標の設定及び事業評価の手法について相談させていただきたいと考えております。評価指標というのは、運営計画の中の16ページに記載されているんですけども、数値で表しやすい評価指標と、数値で表しにくい事柄の評価指標がございます。数値で表しやすい評価指標は問題ないのですが、表しにくい評価指標につきましては、利用後のアンケートですとか、ミッションに関連する質問とかをさせていただいて、参加者にどのように変化が生まれたのかなどを考えております。資料1-4は、アートファーマーからのアンケート結果ですが、評価指標とする観点から設問しております。どんな発見があったか、どのような場面で創造力が刺激されたか、どのような学びがあったか、あなたにとって最も印象に残っているものは何か、気持ちの変化、行動の変化、具体的に何か始めて取り組んでいるかなど、評価を意識したアンケートにしております。そういったものを参考にしながら、今回サンプルをつくりましたので、こちらの方をご覧いただきたいと思います。資料3-2は、個別評価ということで3つの事業の評価サンプルを作成しました。アクティビティの項目には、独自の事業モデル構築と実践などがありますが、そのどれに該当しているのか印をつけるようになっております。アウトプットの方も、中期運営計画に記載されている、アートの力を体感し創造性を喚起させる場が提供できているかなど、そういった項目の該当するところに丸をつけます。中間アウトカムではアートを通じた学びの拠点をつくるか、いずれか該当するところに丸をつけ、最後に自己評価をするということなんですけれども、評価指標3のところでは、来館者アンケート結果や、アートファーマーアンケート結果を参考にしてはどうかと考えております。これはたたき台として作成したのですが、それぞれの事業を評価するためのシートをどのようにまとめたらいかがご意見をいただきたいと思います。どういった事業を抽出していくかは、資料3-3にあります。今回のサンプルは表の印がついている3事業となっております。

○館長： 補足ですが、今後については資料3-1の4ページにありますように、評価アドバイザーから支援を受けて、評価をもう少し具体的に詰めていければと考えてお

ります。個別評価票についても資料3-3にこの3年間の事業リストがあるのですが、全事業について詳細に評価票をつくるのか、それとも主要な事業を絞ってその一個一個の事業を詳細に評価するのか、作業の時間も限られていますので、どういうまとめ方をしていくかについて、アドバイザーに相談していきたいと考えていますし、委員の皆様からも何かご意見をいただければと考えております。スケジュールについては、9月頃までに評価の作業を行い、10月頃に運営協議会を開催させていただいて、そのときに中期評価を報告させていただき、それを受けて令和7年3月頃に3回目の運営協議会を開催させていただき、評価を受けた上で、次期の中期計画案を提示できればと考えております。

◆会長：

はい、ありがとうございました。

中期運営計画に基づく評価についての説明をいただきました。評価について特化した意見を何人かいただければと思います。

◆委員：

次の3年間くらいの評価計画をつくるときに、中期計画をもとに評価を出していくというのが重要な点だと思います。もう一つは美術館の戦略をどう立てていくのかという視点をもう一度このタイミングで入れることが必要かなと思います。例えば5館連携をやっていますけれども、他の4館とこの八戸市美術館がどう違うのかというのを明確に打ち出せるのかということが一つ大事なポイントかなと思います。八戸市美術館の場合は、美術館自体がアートプロジェクトみたいな美術館なので、例えば、その啓蒙みたいなものを広く国内外に認知させていくという戦略を立てた場合、それが達成されるアクションがどう取られていくのかとかいうところから評価軸をつくっていく必要もあるかなと思います。

例えば先ほどウェブ記事を書いているというお話がありましたが、記事の引用件数だったりとか、あるいは例えば学芸員が他の美術館のリニューアル案件に絡んで、八戸市美術館のDNAをどのくらい伝達できたかとか、あとは例えばICOMの中でも美術館の定義っていうのは一昨年ぐらいに変わったのでそれに準じた美術館の運営ってどういうふうに行っていたらいいのかっていうのは、国内だけの議論ではないので、そういったものにどれだけコミットして、八戸市美術館が参照されているのかっていうようなことを指標に入れるとして、この美術館の特色みたいなものを認知させることができたのかというところの評価です。中期計画に沿って綺麗に事業ができていたのかという評価というよりも、戦略が達成できたのか、戦略通りに動いているのかという評価軸を一つかませると言うことがプラスされるといいのかなというふうに思います。以上です。

○館長：

ありがとうございます。一市立美術館でどこまでそれができるかというのはありますが、私自身も他の美術館や博物館に八戸市美術館の館長として呼ばれたりしているところもありますので、できる限りそういった影響力みたいなものを示せるか、ちょっと考えてみたいと思います。

◆委員：

伊藤委員がおっしゃる戦略を見直すこともすごく大事なと思う反面、評価に関しての数字として、入館者数が一番わかりやすい評価軸になると言えますけれど

も、ここ3年でコロナがあったので、全く当てにならない数字になっています。美術館や他の劇場だとかもそうなんですけど。もう20年で6分の1に減ってるわけです。だからもう何%上がる下がるじゃなくて、ものすごいドラスティックな変化が起きていることを知っておかなければなりません。ですから、数字的なものに対応するというのもなかなかそういうわけで難しいですし、それともう一つはSNSのアクセス数トップだとか、SNSを使い分けるかっていうのも実は非常に重要になってきている時代に入っているんですよね。この数字の問題は難しいんですけども、何かその数字の今後のつくり方を考える必要があると思うというのが一つです。あとはやっぱり何か新しいエピソードって言ったらいいか、物語をとらまえて、それを蓄積していくとか、そういうことも実はアナログだけでも、大事なのかなというふうに思います。

◆会長：

はい、ありがとうございました。

○館長：

そういう意味ではこの評価表のところの評価指標というところに、できるだけ定量からそして定性的なものを考えなきゃいけないなと思います。志賀野委員のお話というエピソードについては、こういう評価では多分すごく重要なことだと思いつつ、どういうふうにエピソードのようなものを評価として組み込むことができるのかについては、アドバイザーに相談しながら考えていきたいと思っています。

◆会長：

はい、ありがとうございました。

アートの評価については決して定量化できないものがあります。東京藝術大学もアートの社会的インパクトをどう評価していくのか、しっかり共有できるようにしていくかということの取り組みを始めておりますし、様々な美術館においても今までの評価のやり方が本当にいいのだろうかと悩んでいるのは同じだと思います。とはいえ、きちんと説明していく責任があって、議会などでしっかりと中期の評価を出していかなくちゃいけないということと、今全国的にエピソード的な話でもいいのかもしれないけれども新しい評価を開発しているところでありというような例を出していくっていうものもあるのかなとは思いました。予定した時間を過ぎておりますので全体のまとめを坂本副会長にお願いします。

◆副会長：

今、評価のことについて非常に高尚なお話を伺いました。私どうしても気になることがザワザワと生まれ始めていますので、それをちょっとお話いたします。アートファーマーのアンケートを拝見して、非常に良い意見があって、それが最後の評価に繋がるような内容がちゃんと答えられていますので、アウトカムとして書けるなと思っていますが、例えば「馬場のぼる展」だと、満足度のパーセンテージが書いてあるんですけど163人が回答していました。それがロートレック展のアンケートの回答者は10人とか20人とかすごく少ないんです。あれだけ人が入っているにも関わらず、こんなに少ない人数で評価をするということは、一般的に社会に出したときに、この人数でこう評価したのですかっていう疑問符がつくと思います。個人的には、大方の評価はあっているんだろうと思っていますが、そのデータのもとになるアンケートの数が10%にも満たないわけです。5%ぐら

いですかね3%ですかね。私、この美術館に何回か来ていますが、アンケートを答えてくださいって言われたことはないですし、それでこれ資料見たらですね、総合案内のところに表示してあるって書いてあるんですね。私はアンケートに答えたい人間なんですけれど、自分が答える場面がなかった。ですからせっかく開館して、新しい美術館としてこれから皆さんの意見をどう聞いていくのかという仕組みをちゃんと打ち立てれば、資料1枚お渡しするだけでも、それで例えば書かなくてもですね、美術館職員が頑張って評定してるんだなっていうのが伝わって回答してくれる方もたくさんいるんじゃないかなと思っているわけです。5倍から10倍は増えるんじゃないかと思っています。過去はしょうがないとしても、今後何らかの形でアンケート数を増やしていくことが大切じゃないかなと思った次第でございます。以上です。

○事務局：ありがとうございます。実はアンケート調査を強化させていくつもりでございました。来館者のほか、貸館を利用した方にもアンケート調査を行いたいと思えます。ペーパーのほかQRコードによる回答や、アンケート協力の声掛けも積極的に行いたいと考えております。

◆会長：はい、ありがとうございました。この美術館ならではの取り組みがこれからも期待される場所だと思います。八戸ならではの取り組みや、今開催している「展示室の冒険」は目的が明確な展示内容になっていると思います。コレクションをどう見せるのか、活用するのかという観点で、先ほど佐藤館長に案内していただきましたが、当たり前ですが照明がないところは見えませんが、本当にちょっとした照明でかなり違って見えるという見せ方でした。それは建築家である館長の発想だと思って感心しております。このやり方は色々な美術館で活用できるような可能性も感じていますし、三澤委員のお話もありましたけど美術に導いてくれるような美術館の活かし方にも繋がると思えます。中学校の美術の先生も悩んでると思いますが、あの展示を観て何かヒントをもらえるところもあると思えます。また、展覧会をやるだけではなくて、地元の若手の作家たちの展示もして、その作家たちが地元はどう貢献できるのか、文化観光という言葉も先ほど出てきましたけれども、地元の産業とアートが結びついて自分のアートが地元の産業に貢献できるような、ここならではのコラボレーションや発想で若手のアーティストを育成していくようなプログラムを、アートファーマーなども入れながら展開していくなど、色々とヒントや可能性があると感じました。時間が大幅に過ぎてしまいましたが、では本日の報告議題は以上になります。最後に今後の予定について事務局から連絡事項などありましたらお願いします。

○事務局：委員の皆様、本日は貴重なご意見をいただきまして、大変ありがとうございました。次の会議は、10月頃の開催となりますが、改めて日程調整をさせていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。それでは、本日の会議はこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。